

ギャンブル依存症者の回復の過程の一考察 — “語り” のグループダイナミクスから —

A consideration of recovery process of pathological gambling cases — From the point of "narrative" group dynamics —

熊谷 治子

1. はじめに

今日、精神科医療の分野での嗜癖問題は、アルコール依存症をはじめとして多種多様である。その一つであるギャンブルへの嗜癖を、米国では1980年代から「ギャンブルがやめられないことは自らの欲求、衝動をコントロールできなくなった病気」としての概念が形成され、その診断基準も明記されるようになった¹⁾²⁾。日本では未だ精神科医療の分野においてさえも、アルコール依存症や薬物依存症ほど周知されておらず、積極的な治療や援助には至っていない状況がある。しかし、その治療論はまず「病気と認めること」からスタートするとされ、「認める」ためには同じ状況におかれている「仲間と出会い」、そこから「ギャンブルを完全にやめていく」ことであるとされている。これは自助グループに見られる効果でもある。自助グループとして知られているAA³⁾と同様、ギャンブル依存症ではGA⁴⁾という自助グループが形成されており、米国では診断基準が発表される20年以上前の1957年に発足している。日本においては1989年に設立され、現在20箇所以上になっている⁵⁾。

そこで本稿では、国内においてギャンブル依存症に関する相談機関がまだ少ない状況にある中で、この問題に積極的に取り組んでいる相談機関の協力を得ながら、グループアプローチを通して、自分を語り、仲間の話に耳を傾けていく中で生ずる当事者の変容と回復の過程の一端を明らかにしていきたい。

2. 調査の方法

1) 調査目的

本調査は、ギャンブル依存症と診断され、その回復を目的としたグループに参加することにより、参加者がどのような変容を辿っていくのか、グループで実際に起きていることを明らかにし、グループアプローチによる回復への有効性を考察する。

2) 調査対象

本調査は、H精神保健福祉センターにおいて行われているギャンブル依存症グループミーティング(以下G研とする)の協力を得て行った。グループ開催は月に3回(定例化、但し2001年10月からは月に2回)。時間は午後の6時30分から8時までで、仕事を終えてからも参加し易い設定となっている。参加は本人の任意であるため、グループメンバーは数名固定化しているメンバーもいるが流動的である。

3) 調査期間

2001年7月17日～2001年10月30日

4) 調査方法

メンバーに参加の同意を得て上記期間中計11回参加した。その中で担当医師の協力により、グループ実施場面の録音に関して研究目的で使用することを約束した上で依頼し、了解を得た。そこで、7月～9月の各月計3回の録音を実施した。

5) 分析手順

録音を実施した3回分のセッションのテープ起こしを行い、それを逐語録にまとめた。テープ起

こしおよび逐語録の作成は、プライバシー保護のため、すべて筆者が行っている。

逐語録は話し手が一呼吸おいたところ、また話の内容の切り替わりなどを一つの区切りとしてそれを1文（1センテンス）とした。そして、参加者は「今、ここで」どのような思いを持っているのかという問いをかけながらそのセンテンスのコード化を行い、各セッションにおける発言テーマに即しながらカテゴリー化、ラベル付けを行った。3回のセッションで抽出されたラベル（以下テーマとする）は、『A考え方と行動の変容』・『B語りの重要性』・『C仕事の問題』・『D回復のプロセス』・『E自分が変わる相手が変わる』・『F仲間の良さ（GA）』・『G家族との関係』・『Hギャンブル中心の生活のふり返り』・『I湧き出る欲求』・『J病気認識』・『Kグループへの期待と収穫』・『L変えたくても変えられない苦痛』・『M性格の問題』・『N自分を好きになる』・『O地獄を見る』・『P時間と空間の課題』・『Q娘の問題』・『Rスリッパの体験』・『S体験を役立てる』・『T会社での研修報告』・『Uギャンブルと物事への自己責任性』・『Xギャンブル以外の共通する問題』・『Y借金問題』・『Z自分を認める』であった。

後述する分析結果①のセッションの流れで提示する図1-1～3は、3回のセッション毎にセラピスト（Th）を含む各メンバー間のやり取りを、矢印や線で表示し、その構造と力動について図式化したものである。セラピストは司会を務めているので中心的存在ではあるが、図中セラピストを中心としたのは、あくまでも図の煩雑さを避けるためである。また、各矢印横の短矢印（←）は、メッセージの送り手と受け手の方向を示す。矢印横の数字は発話数⁶⁾で、会話は通常複数の人が話し手としての役割を交替しながら進むものであるため、ここでは、一人の話者が話した一方向、一回分を発話の単位とした。つまり、発話順において、一度に一人が話した単位（片道）を1とした。更に各々のメンバーが発言するおおよかな発話量を確認するため、逐語録に落とした行数を検索した（1行20文字、句読点含む）。行数換算は、段落変更のため行途中で終了し、20文字まで至らないも

のも1行とした。これを発話量とする。そこで、セラピストと各メンバー間で交わされた総発話数と総発話量（行の合計）を図中に示した。さらに、メンバー間も含め、共有された話題のテーマ（A～Z）別にもその発話数と発話量を表示している。なお、主な発言テーマ（A～Z）を吹き出しに示しているが、語りの中で更にサブカテゴリー化されたテーマが見出された場合は括弧内に表示している（後述する分析結果①のセッションの流れにおいても同様に記載）。また、話題の中で各メンバーの家族や職場の人間関係が窺われたため、セッション毎にその関係を図中に表示している。

なお、3回のセッションに参加したメンバーのG研参加開始日、および3回中の参加回数を表1に提示する。

表1 メンバーのG研参加開始年月と参加回数

参加回数	メンバー（開始年月）
3回参加	M1 (1993. 11)・M5 (1998. 10)
2回参加	M3 (1997. 3)・M4 (1998. 11)・ M6 (2000. 7)・M8 (1999. 9)・ M9 (2000. 8—中断し2001. 8再開)
1回のみ	M2 (1998. 5)・M7 (2001. 7)・ M10 (2001. 9)・M11 (2001. 8)・ M12 (1998. 12)・M13 (2001. 8)

3. 分析結果①

—各セッションの流れとその概要—

ここでは、各セッションにおける流れを提示し、グループ内でどのような対話がなされ、各メンバー間の相互作用がおこっていたのか概観していく。

ここでは、各メンバーの語りの内容をみるばかりではなく、グループの構造や力動も紙面の中で描いていきたい。そこで、それぞれのメンバーがどの程度各話題について発言していたのかを示すために、各セッションの毎に各メンバーの総発話量とそれに対するテーマ別の発話量を括弧内に表示している。なお、生のデータは膨大な量であるため、紙面の都合上一部分のみの表示となってい

る。

1) セッション I

実施日：2001. 7. 24 (参加者6名)

参加メンバーの中に初めての参加者は居らず、断続的ではあるものの参加を始めて1年以上のメンバー6名で構成されていた。

【セッションの実際】(図1-1)

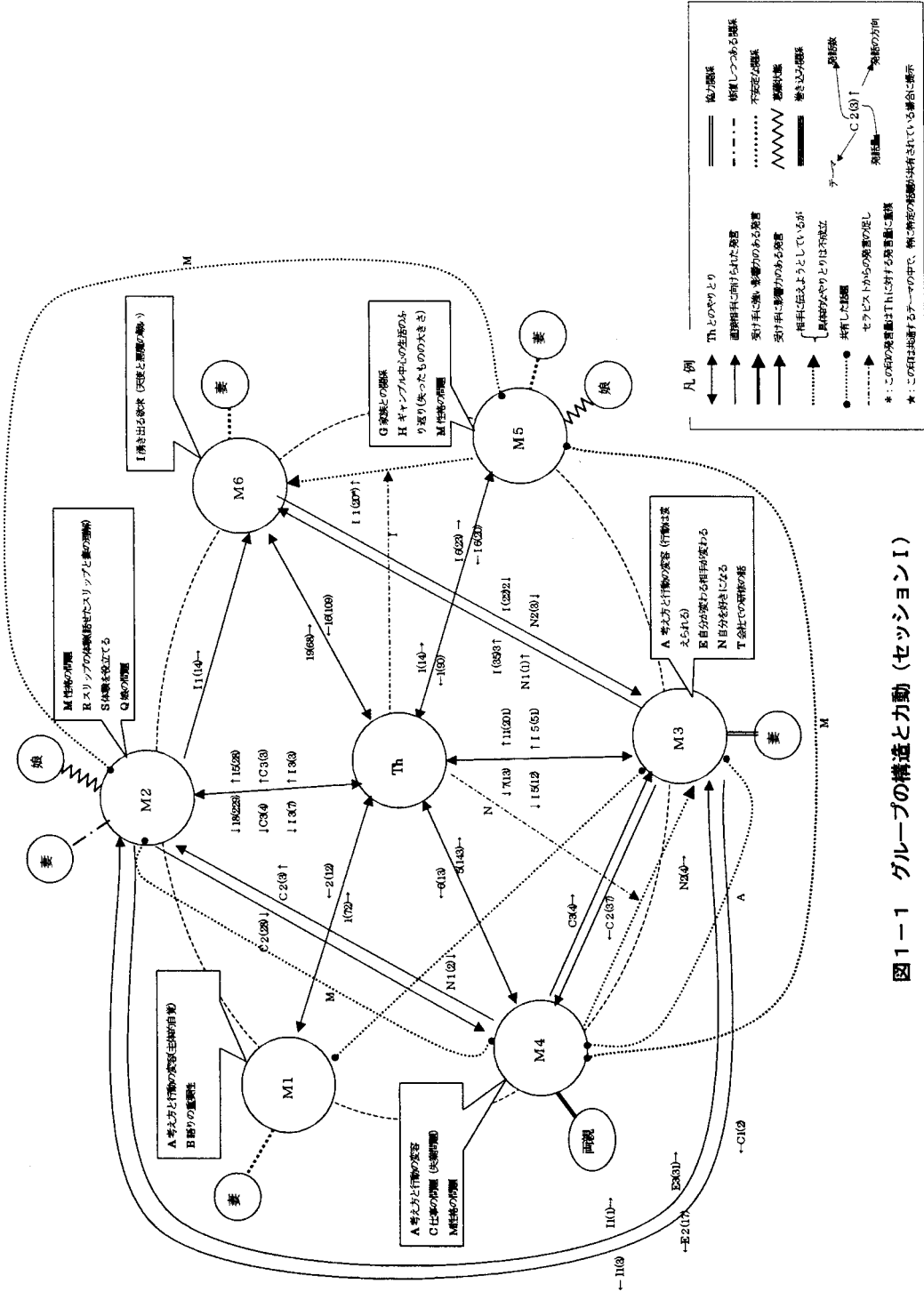
最初に、継続的に一番長く参加しているM1から発言。主体的なグループへの参加の必要性、考えと行動を伴わせることの難しさ(『A考え方と行動の変容(主体的自覚)(発話量22/74,以下同じ)』)、そしてギャンブルをしたいという欲求が出た時には仲間の声を聞くことで抑制になっており、中でも言葉に出して話すことが大切であること(『B語りの重要性(30/74)』)について語った。次にM2より、最近スリップ⁷⁾したが過去のスリップと比較し、自ら妻に打ち明け、妻も理解してくれたことの違いを語り(『Rスリップの体験(話せたスリップと妻の理解)(59/314)』)、更にその自分の体験を役立てたい思い(『S体験を役立てる(43/314)』)について触れた。また、スリップと重なって起きた子供のトラブル(『Q娘の問題(80/314)』)や何かひとつのことに凝るとそれに集中してしまう性格(『M性格の問題(13/314)』)について語ったが、この話題は、後のM4やM6が共有している。そして、M3が「G研にも通じることがあるから」と提供した研修会での話(『T会社の研修報告(105/347)』)から、性格は変えられないが行動は変えられると言われたこと(『A考え方と行動の変容(行動は変えられる)(5/347)』)や相手に変化を求めるのではなく自分が変われば周囲は変わっていくこと(『E自分が変わる他人も変わる(14/347)』)などの話題を提示。次に、それまでのメンバーの話題を受けて、M4が活気ない表情で「問題は性格なのか(『M性格の問題(5/150)』)、行動は変えられるというけれど考え方が問題なのか(『A考え方と行動の変容(61/150)』)」と自問しながら、失業中で中々就職先が決まらないこと(『C仕事の問題(失業問題)(39/150)』)と、自分の考え方の問題とを交錯させていた。それに対し、M3から自分達にはギャンブルの問題があるため情熱を

出すことが難しいこと(39/347)、M2より面談官との視線の合わせ方のポイント(32/314)など年齢的にも先輩のメンバーからのアドバイスを受け、M4は少し明るい表情となっていた。更にM5から、M2やM4が語っていた性格について「…やっぱり性格だと思うんですね…」と最後の100円までレースに賭けてしまう自分の傾向について(『M性格の問題(9/110)』)、そうした競馬中心の生活によって家族との関係で失ったものが大きかったこと(『Hギャンブル中心の生活のふり返り(失ったものの大きさ)(52/110)』)について語り、更にそのような自分の考え方を改める必要性(『A考え方と行動の変容(3/110)』)について触れた。

そこで、セラピストが最近メンバーから自分を変えていくという話題が出ていることについて触れる。すると、M3は研修会で「自分をね、自分を好きになりなさいって言われたんですよ」ということを報告(『N自分を好きになる(56/347)』)。この話題提供に対してセラピストがM4に発言を促すと、「自分を誇って、びたっとやる人は羨ましいですね」と、すると遅れて参加していたM6が小声で「羨ましいですね、そういう人がいると…何か聞いていて、中々自分で自分があまり好きではないなって思って」と呟いた。M1もまた「うーん、今ふと思っちゃった。前は自分のこと好きだったんじゃないかなーって」と語り、次々に『自分を好きになる』というテーマに反応が見られ、話題の共有がなされた。

最後に遅れて参加したM6から、やめてはいるが、ギャンブルへの欲求が湧いてきて辛くて仕方がないということが切々と語られる(『I湧き出る欲求(87/134)』)。それに対して、セラピストに促されたM5がギャンブルをやめていくまでの気持ちの変化について語り、その後M3、M2から自発的に自分達が体験したギャンブルへの“湧き出る欲求”について、その苦しさを“悪魔と天使の戦い”という譬えを用い、共感に満ちた対話が展開された。少し長くなるがその一部分を提示する。

M6：ちょっとやめていられているんですけど、



もの凄い禁断症状なんですよ。凄いですね。……もう行きたくて、行きたくて。

M3 : 私ね3ヶ月、3ヶ月位すっごいしんどかったです。……僕はおかみさんに電話してね、「今やりたくなっただけど」って電話して、「我慢しなさいよ」ってかみさんの声聞いて、やめる。……やめていると何か、ここに鉛があるような感じで(胃のあたり指す)。……ああこれパチンコやるとこの重さ全部パーっと多分飛ぶんだらうな一って。絶えずこうず一と何か、沈殿している……。

M6 : 飛ぶんですよ。……これから行こうかなって思うと、パッとその瞬間ね。そうするとまた、戦いなんです。行けないから。こーんなに楽になれるのに、どうして行けないんだらうって。それこそ、家で一人でこんなになってね(頭抱える格好して)、家族は、「何やってるの?」って。「今じっと耐えている」って。家族は笑ってますけどね……。

Th : ……聞いていても何か自分の中で戦っているんでしょう。何か行きたい自分と、やめたい自分と。

M6 : 戦っているんですよ。

Th : 戦っているから良いよね。戦いやめて……

M3 : 戦いやめて……天使と悪魔がよく、漫画でやっているのあるじゃないですか。最後は全部悪魔になっちゃって(笑い)。

M6 : 戦っていますもの。本当に。「ほら、今日は絶対勝てるから、行け、行け、行け、行け」って言ってますもの。

M2 : ……ここに通ってもまだパチンコ行きながらスリッしていた時、あの時っていうのはね、ここに来るまでと違って戦っているもの。パチンコ行ったらダメなんだっていうのと、行きたいっていうのとその思いはあるの。あるんだけど結果的に悪魔が勝って行くんだから……。

M3 : ……悪魔が勝ってパチンコ屋行っちゃうんだよね。

M6 : 戦っている最中は、……完全に潰されていますもんね。その時は勝ったパチンコのイ

メージが入ってくるんですよ。私の中に。戦っている時は辛いですよ。完全にノックダウンされる。家族も何もそういう時は、完全に無いですね。まるで無いですね。だから行くの罪悪感全然無いですよ。⇒『湧き出る欲求—天使と悪魔の戦い—』

セラピストはこのやり取りを聴き、改めて大変な所から自分を変えようとしていることが理解できたことをメンバーに伝えた。M6の表情も最初はやや硬いものがあったが、語りが進み、他のメンバーからの共感を受け、その表情に柔らかさと話せたことの開放感のようなものが見受けられた。最後に、各々のメンバーより今回のセッションでの感想を述べ、終了した。

本セッションは、初めての参加者が無く、お互いに顔見知りであったため、メンバー間の積極的なやり取りが見られた。特に、M6の“天使と悪魔の戦い”になぞらえたギャンブルへの“湧き出る欲求”に関する対話は、欲求が湧き出てどうにもならない思いが実にリアルに語られ、聴いている周囲に如実に伝わってくるものが感じられた。

2) セッションII

実施日：2001. 8. 28 (参加者：7名)

これまでG研に継続して参加し、第1回目のセッションに引き続いて参加したメンバー4名(M1, M2, M3, M5)に加え、G研2回目の参加者が1名(M7)、スリッして久しぶりに参加したメンバーが1名(M9)、グループには継続して参加しているが前回は欠席したメンバー1名(M8)の計7名という構成であった。セラピストから自由な話題を持って良いとしながら、“病気と認める”、“病気として考えることについて”、“自分の中で困っていること”、“変えていこうと思っていること”、“苦しんでいること”などのテーマが提供された。

【セッションの実際】(図1-2)

最初にセッションIに参加していたM1が発言。M1はセッションI同様、“考え方を変えていく”ことへの課題を語り、実生活での生活のパターン

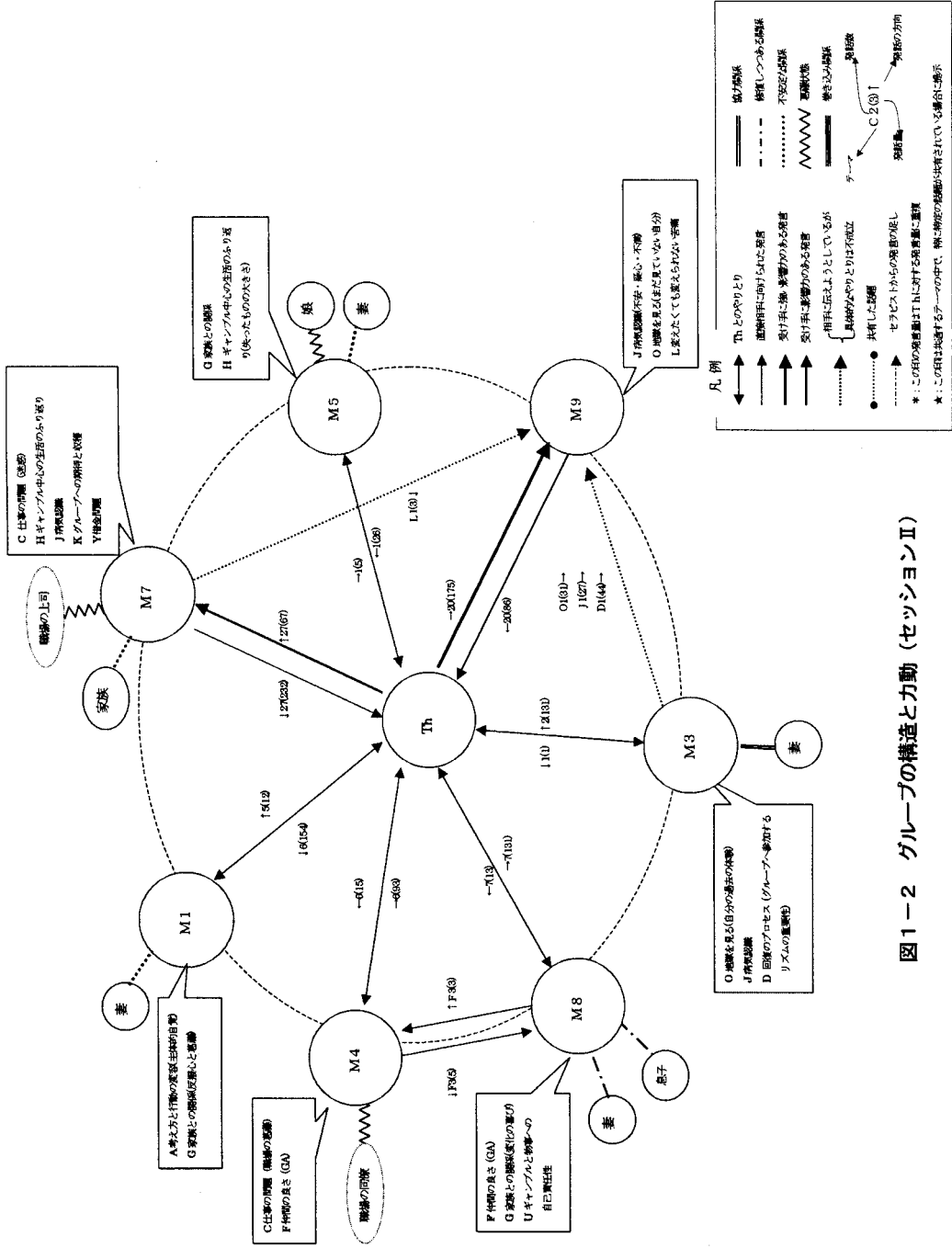


図 1-2 グループの構造と力動 (セッション II)

を変える試みをしていること（『A考え方と行動の変容（43/154）』）、しかし、最近妻に何か言われると反撥心があり、それが葛藤となっていることについて多く語った（『G家族との関係（反発心と葛藤）（79/154）』）。次にM4より、セッションIで悩んでいた失業の問題は解決したが、今度は職場の同僚との葛藤が発生したこと（22/98）。しかし、それをGAの仲間と分かち合えた喜び（63/98）について、M8と共に次のように生き活きと語っている。

M4：……そういうちょっと頭に来るやつと組んで、それでちょっと自分自身おかしくなりかけたんですよ。正直言って。で、その時にあの一応木曜日に行ってあの**さんにいろいろそのさらけ出しちゃって（笑い）……GAのミーティングで。あの完全にあれはストレス発散で、こう鉄砲玉のように喋りまくりましたね。（笑い）

M8：終わってからね。

M4：そうそうそうそう。（笑い）

M8：良いですよ。

M4：あれけっこうしたもんね。けっこうしたもんね。⇒『C仕事の問題（職場の葛藤）』・『F仲間の良さ（GA）』

そしてM8は、M4に続きGAの良さについて（『F仲間の良さ（GA）（14/131）』）、家族との関係において嬉しい変化があったこと（『G家族との関係（変化の喜び）（23/131）』）、更に自己を振り返り、何事も自分の責任であるという考えを述べた（『Uギャンブルと物事への自己責任性（36/131）』）。続いて今回G研参加2回目のM7が発言。初めてグループに参加し、集まりは勉強になると感じていること（『Kグループへの期待と収穫（30/235）』）、先生に言われたことで、真面目に病気なのかと思い始めたこと（『J病気認識（18/235）』）など、グループや病気への思い、その他以前はギャンブルでプロになろうと思っていたこと（『Hギャンブル中心の生活（57/235）』）や仕事に大きな影響を及ぼしてきたこと（『C仕事の問題（迷惑）（37/235）』）

に触れた。

次に、M9がセラピストに促されて発言。M9は1年ぶりにスリップしての再参加であった。硬い表情で、他のメンバーが話している間も終始うつむいていた。そして、治療によって回復することやグループへの不安や疑問（49/86）、治したい気持ちはあるが変えられない苦痛（12/86）をセラピストに投げかけ、セラピストから問題の焦点化や直面化（confrontation）が行われ、グループの中に緊張した空気が流れた。それを以下に示す。

M9：……治療によって回復する病気だってありますけれど、ここに来て治るのか。それが第1の不安と、疑問と……。（パチンコ店に）ここへ参加していた人が来たわけなんですよ。それでああ、これはつまりは、来ても治らない場所なんだって自分でそう思い込んでしまったんですよ。……これ、治療によって回復する病気だって今分かって、どのような治療法があるのかな。ここに参加していて、その治療が見つけれられるのかっていう、ふまん（と言ってしまった後で）不安もあるし。⇒『J病気認識（不安・疑心・不満）』

Th：うん、でも不満があるように見えるけど？……ここに不満があるみたいだよ。

M9：……ありますね……参加していて皆さんの話し聞いていて、自分に取り入れれることがあれば良いかなと思ったんだけど、あとは自分自身だっていう、自分が治さないと誰がやっても自分自身の問題なんだ、ということになると……。自分には治せない、……自分はまだ地獄を見ていないのかな……。⇒『J病気認識（不安・疑心・不満）』・『O地獄を見る（まだ見ていない自分）』

Th：地獄見ているじゃないか？見ててもこれだけやるということは地獄を見ないようにしているんですよ……。充分地獄なんだと思うよ……。

あなたそれ変えたくないだろうさ、まだ。

M9：変えたくても変えれない自分が悔しくて。

変えたくて、変えたくて、本当に変えたいです。……今はもう、要するにギャンブル、パチンコ屋に行くとまた、……今抑えているんですけどね。⇒『L変えたくても変えられない苦痛』

Th：……（この病気は）治るのかというと治らないんですよ……。治らないからその症状を出さないように、隠していける、その方法をここで体得していく。

M9：要するにミーティングから話し合いから治していくということですか？……それが治療法ですか？ ⇒『J病気認識(不安・疑心・不満)』

ここでM7より「大変なことだっけ分かっていて、でも、とび越えてしまえば飛び越えてしまうんですよ」とM9へ共感する発言が見られた。また、セラピストが発言していなかったM5に発言を促すと、自分自身も最初からやめることは考えておらず、うまくやればという思いがあったが、ギャンブルが原因で家族の信頼を失ってしまい、その大きさを感じた頃からギャンブルに対して興味が沸かなくなったこと（『Hギャンブル中心の生活のふり返り(失ったものの大きさ)(24/26)』)を話す。最後に、前回も他のメンバーへ積極的な働きかけをしていたM3が発言。M9に対して、自分がかつて感じた地獄(27/131)、病気をどう認識していくのか(31/131)、またグループに通うことでの回復(56/131)について、その体験と思いを語った。これも少し長くなるが以下に提示する。

M3：……通うことによって、ギャンブルもずっと止まっていますし、……こう順調にズーッと上るのではなくて、やっぱり4年半の間に少しは戻ったり、またここに来て上がったたり、……所謂こうぎこちなく、なんというのかな、こう出来たようなイメージを持っているんですよ。⇒『D回復へのプロセス(グループへ参加するリズムの重要性)』
それでまあ地獄見たっていうのも、……やっ

ぱり2回目発覚した時には、夜、M港行って、ここで飛び込んだら、もう全部チャラになるから良いだろうな、なんて思ったけれど、……本当に地獄っていうのはないような気がするんですよ。だから気持ちはわかるんですよ。もっと自分にしっぺ返しみたいの、痛いことされると、自分は治るのではないとか。……まだ、自分にこう試練が、何ていうのかな足りないんじゃないかって、いう気持ちが所謂地獄だと思うんですよ。⇒『O地獄を見る(自分の過去の体験)』

まあ病気だからね。訴えるものがあって治るわけじゃないから。患者がね訴えてもらって治るわけじゃないから……。回復っていうのもさっき言ったように、ズバツと薬あるわけでは無いし、胸にビーンって響く言葉を毎回、こう飛び交うわけじゃ無いですからね。⇒『J病気認識』

最初の内はカミさんを少し何か、あの罪滅ぼしのために通ってきているうちに、段々何か、周りの人の話が何ていうんですかね、ちょっと参考になったりする。最初、こうがちがちの気持ちの時に何聞いてもパンパンって跳ね返っちゃって、中に染み込んでくる言葉なんて無い気がするんですよ……。ここまで来るとね、誰かが言ったことがちょっとストン入ってきたり、……色々な人の話がこう自分に入ってくるって言うかね……。ここに来るっていう何ていうかね、生活リズムみたいなもの出来ますよ。例えば仕事はこの日は絶対外すとか……。そういう風なリズムが出来ちゃうと、……意外とこう何ていうか出来ちゃうっていうか……。⇒『D回復のプロセス(グループへ参加するリズムの重要性)』

このM3の語りを、M9は表情を変えずに黙って聞いていた。最後にセラピストから、M9が正直な自分の気持ちを語ってくれたことに対しての労いと、M3から自分の生活を変えていくことで自分を変えていく体験が話されたことを確認し、

セッションを終了した。

セッションⅡはセラピストとM9との緊張するやり取りが見られ、全体としてのグループの動きは積極的ではなかった。しかし、M9の病気を中々認められない気持ちに、M7、特にM3から共感と自分の体験の伝達が見られていた。また、言葉としての表現が無かったため図示されていないが、メンバー間に言葉に拠らない共感の態度が見られていたように思われた。

3) セッションⅢ

実施日：2001. 9. 25 (参加者：9名)

第1回目、第2回目のセッションに引き続いて参加したメンバーは2名(M1, M5)、第1回目参加以来のメンバー1名(M6)、第2回目に参加したメンバー2名(M8, M9)、グループには長く来ていたが久しぶりに参加したメンバー1名(M12)。その他、全く初めて参加したメンバー1名(M10)と比較的新しいメンバー2名(M11, M13)の計9名という構成であった。テーマは特に設定せず、セッションは開始された。

【セッションの実際】(図1-3)

初めに、セッションⅠで“天使と悪魔の戦い”を譬えに“湧き出る欲求”の辛い葛藤を切々と語っていたM6が発言。以前よりも落ち着いた様子で、欲求を抑えている反動のためか、何かしていないと落ち着かない焦燥感に駆られること(『I湧き出る欲求(反動としての焦燥感)(20/99)』)。しかし、最近では欲求のある自分や、ギャンブルが好きな自分を素直に認めることの必要性に気付き(27/99)、そこで、依存症と上手く付き合う方法として、認めた自分についてG研やGAなどの仲間と話すことが大切であること(13/99)、そして、実はこの辛さを一番身近な家族に理解してもらいたいという気持ちがあること(35/99)について、少し憚りながら語った。

M6：……これが自分なんだ、そういう自分をあのきちんと見なきゃいけない……やっぱり認めちゃった方が早いと思うんですよね。ギャンブルが好きなんで。……そうい

う自分を受け入れて、その受け入れた気持ちをG研やGAで話す。素直に話すことによって、……依存症と上手く付き合っていく……⇒『Z自分を認める』・『B語りの重要性』

……で(8秒の間)女房に話したんですけども……やっぱりあの一「えーまだそんなこと思っているの？」みたいなこととか、「やっぱりお父さんの気持ちがよく分からないんだよね」と言われることが続けてありまして。……やっぱり家族の理解ということが……うん、一番身近に居るのは家族ですから……⇒『G家族との関係(家族への理解の希望)』

次に毎回参加しているM1から、最近M1のテーマとなっている“変える”ということについて、少し自分が変わってきている実感があること(『A考え方と行動の変容(50/124)』)、そして、前年から課題として提示されていた“家族への反撥心”に関して、グループの仲間から言われたことに対しては腹が立たないことの気付き(『G家族との関係(反撥心と葛藤：家族⇄仲間)(21/124)』)、更にM6の焦燥感に呼応して、ギャンブルをやめている間の時間の過ごし方に自分も課題があること(『P時間と空間の課題(12/124)』)について語った。続いてM8も時間の使い方(『P時間と空間の課題(27/137)』)について触れ、最近、時折ギャンブルへの欲求があること(『I湧き出る欲求(21/137)』)や、過去に過剰な買い物の問題もあったこと(『Xギャンブル以外の共通する問題(41/137)』)について語り、更に、セッションⅡで語っていたGAの魅力について再度触れていた(『F仲間の良さ(GA)(14/137)』)。初めてのメンバーM10からは、「自己紹介だけ」と遠慮がちの様子であったが、ずっとパチンコがやめられなかったこと(『Hギャンブル中心の生活のふり返り(25/207)』)、それに伴い繰り返した借金(『Y借金問題(13/207)』)や家族との軋轢(『G家族との関係(20/207)』)、中々病気とは思えなかったこと(『J病気認識(7/207)』)について吐露した。続いてセッションⅡで

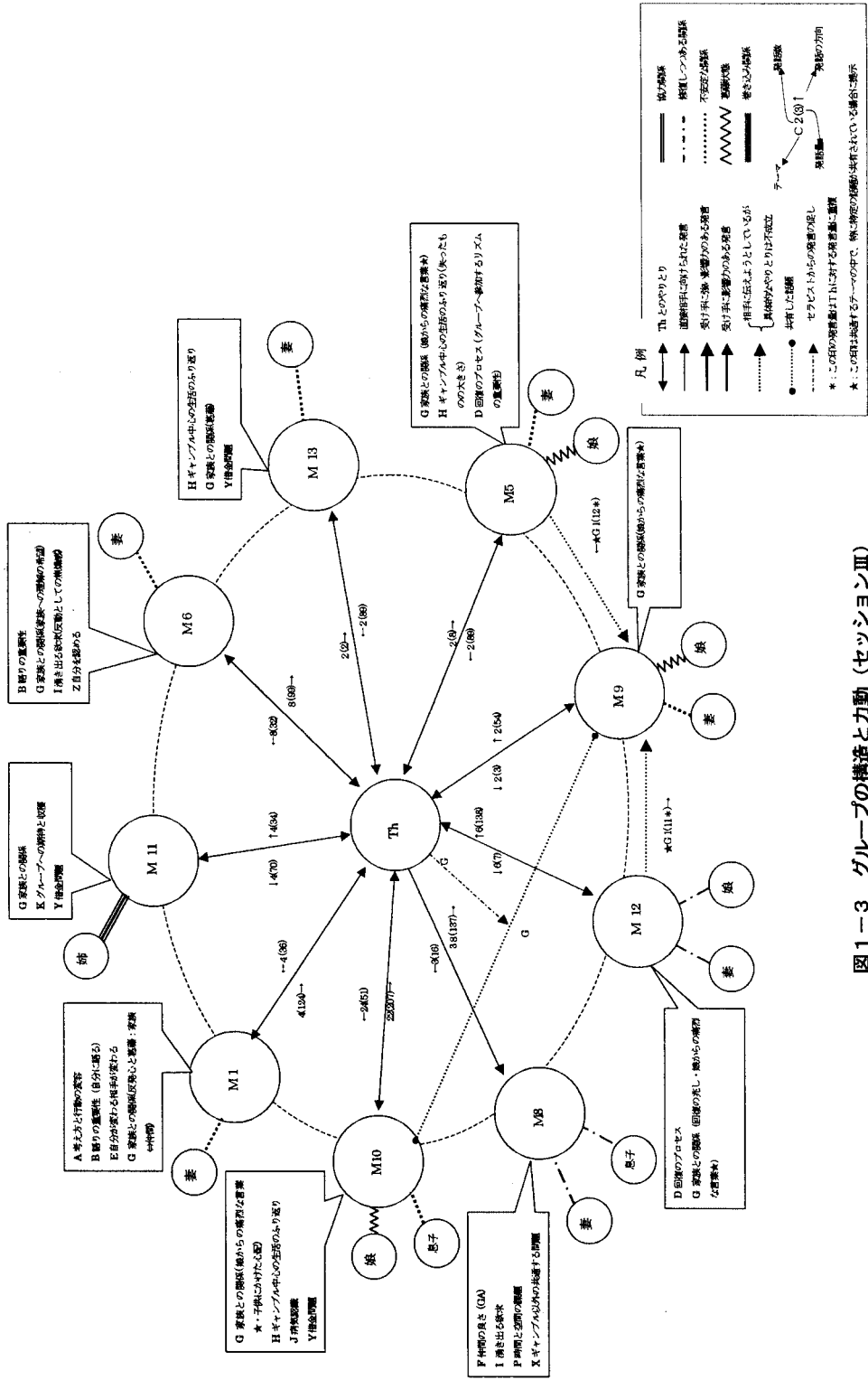


図 1-3 グループの構造とカ動 (セッションⅢ)

セラピストから病気認識に関して直面化 (confrontation) が行われたM9は、暗い表情で、娘に言われた痛烈な一言にショックを受けたことを切々と語った (36/54)。

M9：家内とまあいろいろと話をしていたんですけどね、それで娘に「死んだらわ？」って言われて、自分には娘がこんなこと言うなんてびっくりしたんですよ。死なないと治らないんじゃないか、という話になって、それであの寂しいやら、悲しいやら、複雑な気持ちでね……。そんなこと言う、言われたっということがすごいショックで。それを聞いた時には、これじゃいけないなって。娘がここまで思っているんだっていう。これで死ななきゃならない、それ位の気持ちには初めてなりました、……やっとな娘の一言が、頭にびっちり入っていて……。⇒『G家族との関係 (娘からの痛烈な言葉)』

ここで、セラピストから初めて参加したM10へ家族との葛藤について再度発言を促した。M10も同じようなことを娘から言われたこと (51/207) や、病気とは中々思えず、相談に来るのに時間がかかったこと (16/207) を改めて振り返った。

M10：……娘に電話しましたらね、……「お母さん死んでどうにかしなさい」って……。兄弟の所も電話してみたらね、もう娘から絶対貸さなくていいという電話が入ってまして……。やっぱりもう、死ぬより他ないって……。先生にお会いして、自分で治せると思いましたけれどね、治せないんですね……。パチンコ位自分で、たかがパチンコ……。病気って認めないんですよ。でも最近、病気だっというのかな……。⇒『G家族との関係 (娘からの痛烈な言葉)』・『J病気認識』

続いて継続的に参加しているM5より、いつものように、ギャンブルを繰り返してきた中で、家

族の信頼を失ったこと (『Hギャンブル中心の生活のふり返り (失ったものの大きさ) (26/90)』)、また、自分も娘に詰られたこと (『G家族との関係 (娘からの痛烈な言葉) (24/90)』) をM9へ共感を込めて語った。更に、今自分が回復に向かう中で、G研に来ることと、土日、祝日を上手く生活していくリズムを作っていくことが必要であること (『D回復のプロセス (グループへ参加するリズムの重要性) (5/90)』) について触れた。次に、今回G研参加が4回目になるM11からは、今は仕事が忙しくてギャンブルのことを考えている余裕がないことなど近況報告の他、グループに参加することでの回復への期待 (『Kグループへの期待と収穫 (5/70)』) を示し、現在も抱える借金のことで気持ちが落ち着かないこと (『Y借金問題 (14/70)』)、監視下でありながらも協力してくれている家族を裏切れない気持ちがあること (『G家族との関係 (18/70)』) について語った。そして、セラピストからは借金のために落ちつかなくなる気持ちに対し、“ギャンブルをやめるために、ギャンブルをやめなければならぬ”と、借金のために追われる生活となってしまう病気の恐ろしさを伝えた。

続いてやや久しぶりに参加したM12に発言が促される。やめてから丸3年になるこれまでの経過について (『D回復のプロセス (30/138)』)、その昔、M9同様、娘からの痛烈な言葉を浴びる体験があったが、現在は家族との関係も修復していることなどを中心に語った (『G家族との関係 (回復の兆し) (57/138)』)。最後に、G研参加2回目のM13が発言。やや思いつめた表情で、他のメンバーの話の頷きながら真剣に聞いていた。発言が促されると堰を切ったように、これまで何度も何度も繰り返した借金を巡る問題 (『Y借金問題 (34/89)』) と妻との葛藤 (『G家族との関係 (葛藤) (33/89)』) について吐露した。

9人のメンバーの発言が一通り終わり、最後にセラピストから今回のセッションでは「ギャンブルを続けてきた結果の中で、家族を相当傷つけてしまっている」こと、そして「子どもが大きくなると、思っていたことをポンと返され、そのことでちょっと変わる転機となる。しかし、家族にとつ

ては相当前から言っていたことで、ギャンブルを繰り返している時には、それが打ち消されてしまっていた」とギャンブルがもたらす家族への影響について触れ、再度病気として認識する重要性について確認し、セッションは終了した。

本セッションは新しいメンバーが3分の2を占めていたこともあり、メンバー間の相互作用は大きく見られなかった。しかし、M9が語った家族（子ども）から浴びさせられた痛烈な言葉について、かつて同じ様な言葉を浴びた記憶とその痛みを持ち合わせたメンバーは、その記憶が呼び起こされ、共感が生まれていたものと思われる。

4. 分析結果②

ーセッションを通しての変容ー

これまで各々のセッションの流れから各グループの展開を概観し、その構造を図式化した。そこで、3回のセッション間におけるメンバーの語りの変容、また、参加して初期のメンバーと長く継続して参加している長期のメンバーとでは、その語りの内容にどのような違いや特徴があるのかを次に示していきたい。

1) セッション間のメンバーの変容

先の表1に示した通り、参加が任意であることから、各セッションでは1回のみ参加者が多い。そこで、2回以上出席していたメンバー（M1、M3～M6、M8、M9）のうちセッション間で大きな変化があったと考えられたのは、M4、M9、M6である。3回共に参加したM1やM5にも少し変化が見られた。M8はそれ程変化は感じられず、M3は各セッションにおいて他のメンバーに対する影響力は大きかったが、自身の変化は見えてこなかったように思われた。その変容を図2に示し、以下その説明を行う。

M4はセッションIでは失業という生活問題を抱え、性格なのか、考え方が問題なのかと自問し、暗い表情であった。しかし、M2やM3から様々なアドバイスを受け、セッションIIでは就職が決まったこともあるが同僚との葛藤を活発に語り、そのストレスをGAの仲間に聞いてもらえた喜び

を表現していた。これは、M4がセッションIでメンバーから力付けられ、仲間意識を感じてGAへの参加へと繋がり、語りにも力が与えられたものと考えられる。また、M9はセッションIIでは病気への認識に疑問や疑心、否定的な思いを持ち、まだ地獄を見ていないとの発言に、セラピストから直面化（confrontation）が行われた。次のセッションIIIでは『病気認識』に関する発言は見られず、娘から「死んだらわ?」と言われことへのショックの大きさと自分への情けなさを語り、「地獄を見た」という表現ではないが、「死ななきゃいけない」と思うほどの気持ちになったと語る。これは、セラピストからのconfrontationの後、更に最愛の娘からのconfrontationが行われたとも考えられる。そして、セッションの中では同じ体験を持ったメンバーからの分かち合いが起きていた。そこでは、M9からもはや『病気認識』をはじめ、グループでの治療に対する疑念や疑心の言葉は聞かれなかった。次に、セッションIで「もの凄い禁断症状」と言って、ギャンブルへの湧き出る欲求を“天使と悪魔の戦い”を譬えに切々と語っていたM6は、2ヵ月後のセッションIIIでは、“戦い”から、“欲求がある自分”や“ギャンブルが好きな自分”を認めていこうと『自分を認める』語りに変容している。表情もセッションIの苦しい面持ちから、ゆとりのある表情へと変化が感じられた。これは、セッションIで同じ体験をしたメンバーと互いに共感しあい、エンパワーされ、それを持ち帰って更に自己を見つめた結果とも考えられる。その『自分を認める』という視点に伴い、そのような自分をGAやG研で話すことで、病気と上手く付き合っていく必要性を語り、更に、家族へ病気の理解を希望する発言も見られている。ここでは、“欲求”に翻弄されていた課題が、“理解”という視点に変化し、自己から更に他者（家族）へと対象に広がりを見せている。

また、3回共に出席していたM1やM5はいずれも長く通っているメンバーである。M1はグループの中で最も長期間通っているメンバーで、3回のセッションで共通していたテーマは、『A考え方や行動の変容』・『G家族との関係』・『B語りの重要

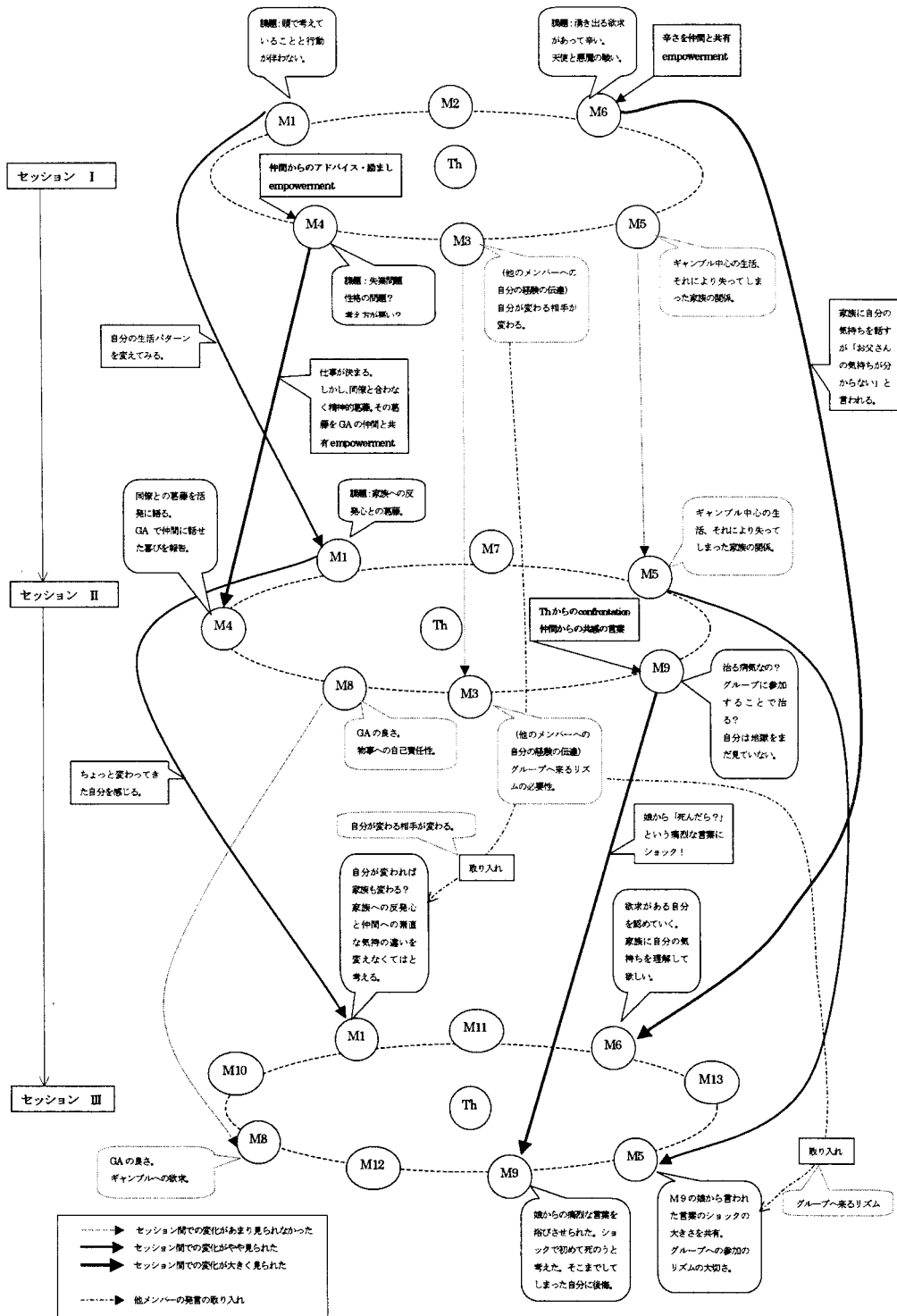


図2 3セッションの変化

性』などである。「まずは、1日1日の積み重ね」であること、「仲間に話したりしながら声に出す」ことの重要性など、各セッションで同じ言葉が繰り返された。そして、セッションⅡでは「朝早く起きる」など自分の行動を変える試みをしているが、家族への反撥心が解消されない葛藤について触れた。それがセッションⅢでは、自分の考を少し変えてきていると自己評価し、

M1：誰が言ったのかな、自分が変われば相手が変わるとというのが、本当だなというのが少しずつ今分かってきましたよね。……自分自身の考え方を変えていけば、まあ、家族にしても考え方が少しずつ変わってくるのかなと思って。

と語っている。これは、セッションⅠでM3から提供されたテーマ『E自分が変わる相手が変わる』を取り入れての発言と考えられる。そして、先のセッションⅢの流れでも触れたが、

M1：家内から何か言われれば、ギャンブルのことも他のことでもですね、……あ、頭にくるって言ったならあれですけど、反論するんですね。……あと、……GA……仲間からですね、言われたことに対してはその腹立たしくなることはないんですよ。……その所の違いを少しずつ変えていかなきゃダメなのかなと、今は思っています。

と家族に対する感情と仲間に対する感情とを比較し、前向きな考え方に変えようとしている。

次に、M5の3回のセッションにおけるテーマの中心は『Hギャンブル中心の生活のふり返り』と『G家族との関係』で、競馬と借金を繰り返し、そのために一人娘が出て行き、失ったものが大きかったことや、それを感じた時から徐々にギャンブルに対する興味が薄れていったことをグループの中で繰り返して話していた。しかし、セッションⅢではM9の発言に自分も娘から詰られ、同じような体験をしたことを語り、

M5：……もう完全に消えたとは思えないんですよ、自分で。絶対に、いつかまた繰り返す、気持ちが……そういう意味で、またセンターに通ったり、土日、祝日っていうようなリズムができて、方法が、体制ができて跳ね返ってくると思うんですよ。

と、グループに参加し、生活のリズムを作っていくことが大切であることを自己に語りつつ、M9をはじめとする他の新しいメンバーへ伝達していたのではないかと思われた。そして、このリズムの話題もセッションⅡでM3が語ったテーマ『D回復へのプロセス（グループへ参加するリズムの重要性）』を取り入れていると考えられる。

このように、各セッションのメンバー間の相互作用やグループ以外の家族などとの関係を経てメンバーは変化している。以上、僅か3回ではあるが、セッション間のメンバーの変容を概観した。

2) 初期メンバー・長期メンバーの語りの違い

次に、3回のセッションを通して参加期間が1年未満のメンバーと、長期間中断し、スリップして再度参加したメンバーを初期グループ、断続的ながら1年以上参加を続けているメンバーを長期グループとして2つのグループに分け、各々のテーマの全発話量を各グループの延べ参加者数で除した2グループの各テーマ別平均発話量を図3に示す。そこで、2グループの各テーマの平均発話量からその特徴を見ていく。

長期、初期共に平均の発話量が比較的多く見られたテーマは、『G家族との関係』が初期（平均発話量：29.5、以下同じ）、長期（20.2）、『J病気認識』が初期（15.8）、長期（11.9）であった。その差は大きくはないが、やや初期メンバーに多い傾向があり、その質的内容は異なっていると考えられた。例えば『G家族との関係』では、初期のメンバーは、借金をしてまで繰り返すギャンブルを巡る軋轢など、家族との葛藤の語りが多い。生活を脅かす借金問題で、家族関係は緊張状態に陥っており、セッションの流れでも触れたように、子どもから

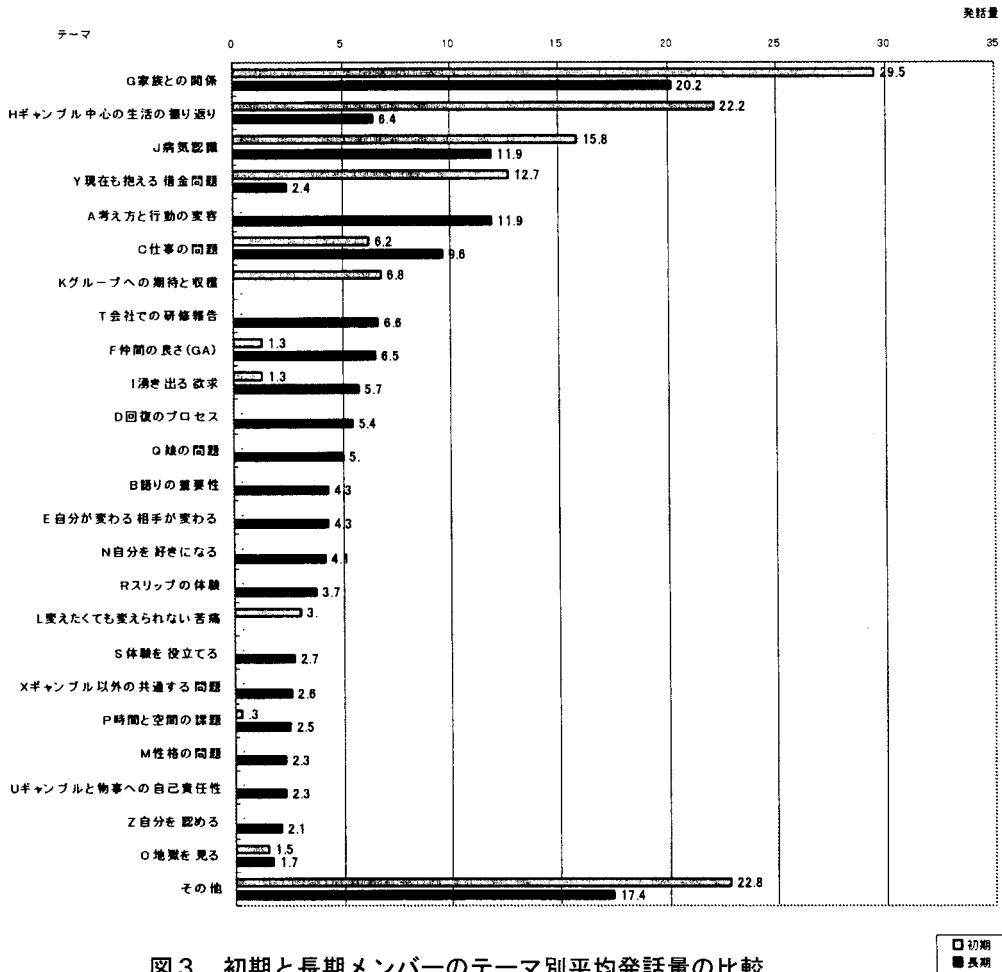


図3 初期と長期メンバーのテーマ別平均発話量の比較

痛烈で決定的な言葉を浴びている。一方、長期のメンバーも家族間の葛藤について語っているが、それは、やめていく上での本人の精神的側面（焦燥感など）を巡る家族との葛藤となっている。家族にとっては、G研に通い、ある程度落ち着いてきているように見える本人が未だギャンブルに対する欲求があることや、イライラすることに対する理解が難しいであろうし、本人にとっては、欲求と戦いながら努力している自分を認めて欲しいという気持ちがあるのだろう。そのギャップが葛藤を生むのではないだろうか。しかし大きな違いは、長期メンバーは家族の言葉が素直に自分の中

に吸収されていく様子を語ったり、修復あるいは回復に向かっている喜びの実感を語っている点である。以下、初期メンバーと長期メンバーの語りの内容を見ていく。なお、表記の（S-I）はセッション I での発言であることを示す。

【初期】—葛藤—

- M7：……回りから言われて、怒られて、言われてもう……あいつは頭がおかしいから精神病院に入れてやろうって……（S-II）
- M9：娘に「死んだらわ？」って言われて、自分には娘がこんなこと言うなんて、びっくり

したんですよ。(S-III)

M10: ……パチンコのことであって皆からわいわい言われて……。……お母さん死んでどうにかしなさいって。(S-III)

M13: もう妻とも、もうこれで別れる話になったんですよけれども……。(S-III)

【長期】—葛藤—

M1: 要するに何言われても反撥したくなるんですよ。……家内に何か指図されるとそれで割り切れないんですよ。(S-III)

M6: 女房はまだ全然分かってきていないんだなっていうことが分かるし。また、分かっていくという風に、しないからなのかもしれないんですよけれども……。(S-III)

M5: 先月の最終週から4週間空いて、それに、あの女房の信用もまだ(笑い)、4週間空いたら大暴走するんだから(笑い)、行ったらって言うんですよ。(S-I)

【長期】—修復・回復—

M5: ……女房も目を見て喋れるようになったし、少し、取り戻している、人間性を取り戻してきている面もあるけれどっという(笑い)。(S-III)

M2: (妻に性格傾向を指摘され)うちのもやっぱり結構見てるんだわ(笑い)。自分では気がつかないんだけど……。(S-I)

M3: (研修で指摘されたことが)結局、(笑いながら)かみさんによく言われていたことが多かったんですよ。……あーやっぱり一番何か自分の本質知っていたりなんたりするのは、悪いことも含めて、知っているのはやっぱりかみさんなんだと思ってね。ああやっぱりかみさんの言うこと聞かなきゃなんないのかなーって、感じて(笑い)。(S-I)

また『J病気認識』に関する話題でもその内容はやはり異なっている。初期のメンバーは、病気と認識することに対する疑問や否定的思いを呈し

ている。しかし、最後には医師の言葉やグループメンバーの発言を媒介にして自分の中で病気と認識しようとする語りが見られる。一方、長期になってくると、自分たちが病気であることを語りながら自己へ確認する作業や、他のメンバーへの伝達といった場面が見られる。

【初期】—病気認識—

M7: あの先生に病気だと言われるまでピンと来なかったんですよけれども、やっと最近ピンと来るようになって、……先生に言われるんだったら、真面目に病気になってきているなって……。(S-II)

M9: 治療によって回復する病気だってありますけれど、ここに来て治るのか。それが第1の不安と、疑問……。 (セラピストに病気と思うには時間がかかることを言われ)いやー、病気なことは病気です。それは自覚しています。(S-II)

M10: 先生にお会いして、自分で治せると思いましたけれどね、治せないんですね……。そんな病気ってあるわけ?……私は、ここに来てはまだ病気だと思えなくて、……病気って認めないんですよ。でも最近、病気だっていうのかな……。(S-III)

【長期】—病気認識—

M3: まあ病気だからね。訴えるものがあって治るわけじゃないから…。(S-II)

M8: 私たちこう依存症という病気になってしまっていて、みんな病気ですから、健康ではないんですよ。(S-II)

さて、初期のメンバーに多く見られるテーマは『ギャンブル中心の生活のふり返り』初期(22.2)、長期(6.4)、『Y借金問題』初期(12.7)、長期(2.4)である。これは、初期のメンバーには、ギャンブルを巡る自分の問題を語ることが暗黙の内に求められること、また、これまで誰にも話せなかったギャンブルの問題を自由に語ることができる場が与えられたことへの安心感から、発話量が多くな

ると考えられる。中でも最も大きな問題は借金問題であるので、このテーマの発言は当然ながら多くなる。また、初期メンバーのみの『Kグループへの期待と収穫』初期(6.8)は、最初のグループへの参加の動機としては相応のテーマであろうし、『L変えたくても変えられない苦痛』初期(3.0)は、2回目のセッションでM9が語ったテーマであるが、何とかして自分を自分の力で変えたいと思うが思うようにならない状況と推測される。この自分の力で変えようという思いであるところに、初期の特徴が見られるのではないだろうか。つまり、ギャンブルに対する自己コントロールの可能性を未だ信じている状況である。

長期のメンバーになってくると、『F仲間の良さ(GA)』初期(1.3)、長期(6.5)、『I湧き出る欲求』初期(1.3)、長期(5.7)、『P時間と空間の課題』初期(0.3)、長期(2.5)の発言が見られている。G研への参加を続けていても湧き出てくる欲求や、ギャンブルをしていた時間への対処が新たな課題として浮上してくる。そして、『B語りの重要性』長期のみ(4.3)に見られるように、欲求や課題の克服の上で、仲間と語ることが抑制に繋がっていることに気がつく。その他、初期に見られていたグループへの期待や収穫は、長期になるとメンバーシップでもある『F仲間の良さ(GA)』として、自助グループGAの存在に対する魅力が語られていた。そして『A考え方と行動の変容』長期(11.9)、『E自分が変わる相手が変わる』長期(4.3)、『N自分を好きになる』長期(4.1)、『Z自分を認める』長期(2.1)など、自己の変容といったテーマが長期参加者より話題提供されている。これらの自己変容に対する思いは、先の初期メンバーが語る『L変えたくても変えられない苦痛』といったギャンブルに対する自己コントロールの可能性や変容への早急で強い願望から、自分と向き合おうという、ゆとりを持った変容願望への質的な変化を感じる。そのゆとりが“自分を認め”、“自分が変わり”、“相手が変わり”そして“自分を好きに”なれたらというテーマを長期参加者のメンバーは提供したり、あるいはその語りに対応するのではないだろうか。また、セッションIでM2がスリッパした体験を

役立てたいとしたことや、M3の「G研につながるものがあつたから」と提供した研修の中での話題など、長期になると個人差はあるが、グループの中で“自分を役立てる”という意識が出現してくる。その他、長期メンバーの発言テーマは多岐に亘り、初期メンバーのように限定されたものではない。これは、同時にグループとしての視点や視野の広がり、あるいはゆとりにも繋がっていると考えられる。

5. 考 察

グループは「相互作用の関係にある成員達の集まり」である⁸⁾。これらグループの持つ力動について岩間⁹⁾はシュルマンの相互援助システムの視点から、また、ヤーロム¹⁰⁾は集団療法における療法的因子として各々11項目提示している。更に、カツツ¹¹⁾はセルフヘルプ・グループにおける特徴として7項目示している(表2)。

そこには、同じ問題に直面した人びとがお互いの情報源になる(情報の分かち合い/情報の伝達)自分の問題は普遍的であり、他のメンバーと分かち合えるものであるといった(みんな同じボートにのっている現象*共通するものを見方を発見すること/普遍性/社会化)、同じ問題を持ったもの同士であるが故に起きる共感的感情(相互の共感的支持/カタルシス/情緒的サポート)、メンバー間のモデリング学習(リハーサル/模倣行動)など、共通する項目が見られる。

G研は、ヤーロムの療法的因子から「回復への希望」・「問題のわかちあい」・「情報の伝達」などを重視している¹²⁾。G研のメンバーはギャンブル依存症と診断され、自身も過度なギャンブルに対する問題を抱えていると感じた者同士という共通項を持っている。借金をしてまで繰り返す過度なギャンブルは、シュルマンの“タブー領域についての話し合い”に合致する。そして、「自分だけ」と考えていた問題は、実はそのグループの中では“普遍性”を持つもので、“みんな同じボートにのっている”という現象に気付く。そこで、これまで語れなかった、語っていなかった自分のギャンブル

表2 シュルマン・ヤーロム・カツによるグループに関する見解

シュルマン (相互援助システムにおける力動)	ヤーロム (集団療法における療法的因子)	カツ (セルフヘルプ・グループに共通する特徴)
情報の分かち合い	希望をもたらすこと	認知の再構築
弁証法的過程	普遍性	適応技術の学習
タブー領域についての話し合い	情報の伝達	情緒的サポート
「みんな同じボートにのっている」現象	愛他主義	個人的な開示
共通するものを見方を発見すること	社会適応技術の発達	社会化
相互の共感的支持	模倣行動	一緒に活動すること
相互欲求	カタルシス	エンパワメント・自己信頼・自尊心
個人的な問題の解決	初期家族関係の修正的繰り返し	
リハーサル	実存的因子	
[数は力なり]の現象	グループの凝集性	
相互援助過程の振り返り	対人学習	

ルの問題を語ることで“相互の共感的支持”が生じ、そこに“情緒的サポート”を感じ、“カタルシス”が起きる。更に、そのギャンブルの問題に対し『ギャンブル依存症』という処方により、カツの示す“認知の再構築”がなされる。当然、病気という認識へと直ぐに再構築されない者もいる。しかし、グループを通してギャンブルに対する考え、家族に対する考え、借金の捉え方をはじめ、ギャンブルばかりではなく人間関係に対する考え方や人生観に至るまで、過去の認識が再構築される。この“認知の再構築”では、G研の場合、セラピストからの教示と、加えて同じ悩みを抱えたグループメンバーの説得力は大きい。そこには、カツが指摘するエンパワメントも起きていると考える。

分析結果①で、各セッションのグループの構造を図示した。グループ全体の力動が大きかったのはセッションⅠであった。これは、初回のメンバーはおらず、お互いに知り合いであったことがグループの力動に与えた影響であったと思われる。しかし、『A考え方と行動の変容』といったテーマ、また特に“天使と悪魔の戦い”になぞらえた『湧き出る欲求』の対話は、当事者にしかわからない気持ちである。故に、互いの共感を喚起したのでは

ないだろうか。そして、それがグループの相互作用に大きく影響したと考える。更にこの相互作用は、分析結果②の「セッション間のメンバーの変容」に示したように、『湧き出る欲求』について語りあったM6はエンパワーされ、後に参加したセッションⅢでは欲求のある「自分を認める」という語りに変化していた。これは、まさにカツの指摘する“自己信頼”の現われでもあり、同時に自己に対する“認知の再構築”と考える。次のセッションⅡはメンバー間の相互作用は積極的ではなかったが、これは久しぶりのメンバーや新しいメンバーの登場に加え、セラピストによるM9へのconfrontationが行われたことが関係している。しかし、それでも長期メンバー（特にM3）は自分の体験と重ね合わせ、共感と伝達の姿勢で接していた。このような長期メンバーの初期メンバーに対する働きかけは、シュルマンやヤーロムの示す“情報の分かち合い”、“情報の伝達”であり、それは、メンバー間のモデリング学習である“リハーサル”、“模倣行動”によるものと考えられる。例えば、M3が語る「病気であるが、効く薬があるわけではなく、G研に来ることによって徐々に回復してきた」といった『J病気認識』や『D回復へのプロセス』の言葉は、自分の体験を通じたM9への情報の伝

達であろう。また、それはM3がこれまで約4年半G研に通い、先行く仲間の話しを聞く中で蓄積してきたギャンブル依存症という病気認識への再構築の産物であり、その過程におけるメンバー間のモデリング学習によるものと考えられる。そして、このM3の言葉は、分析結果②の「セッション間のメンバーの変容」に示したように、M1やM5がモデルとしてその言葉を取り入れ、他のメンバーへ語ることで伝達されていた。こうした伝達作業が、お互いに“認知の再構築”を促しているのではないだろうか。

このように、“認知の再構築”はグループという力動が及ぼす、メンバー間の相互作用によるものが大きい。そこでは、言葉を媒介とした対話による相互作用が起きている。

野口¹³⁾は、ナラティブセラピーの理論から「自己とは物語である。自己は自己を語る言説によって構成される」という認識に立つ時、グループは聞く場であり、語る場でもあるので、セルフヘルプ・グループは「自己を語る空間」、「自己を語り直す空間」とした見方が可能となる。語ることによって人は自己を構成し、新しい自己は新しい語りの中に生まれ、語り直されることによってその都度更新されるのであるならば、グループでは未だ語る事が出来なかった「自己」を語る空間、新たな自己物語を語る空間に他ならず、そこは、他人から「受け取る場」であるよりむしろ、何かを自分で「創り出す場」であり、セルフヘルプ・グループには固有の回復の物語が存在することを指摘している。

われわれは、相手に理解してもらおうと自己を語る事（自己物語）によって自分を改めて理解し、他者の語り（他者物語）から相手を理解し、かつ自己を振り返る。その対話により、これまで自明と考えていたことが、実は自明ではなかったことに気が付くこともある。それは、われわれは自分を語る事（自己物語の外在化）で自己を整理しつつ、語っている自分を受け入れ（取り入れ）、同様に他者が語ったこと（他者物語の外在化）を整理し、受け入れ（取り入れ）る、といった一連の作業を通しながら、自己を再構築していくので

はないだろうか¹⁴⁾。とするならば、G研では自己を語り、セラピストを含む他者からの語りを聞くという相互作用の中で、メンバーは各々（自己と他者）の物語（言葉）を取り入れる作業を展開していると言えよう。そして、これはグループの中だけではなく、先の図2で示したように日常生活の中で織り成される相互作用（家族、職場、また他の仲間）によっても起こっている。M4はセッションの中での相互作用を通して、仲間の良さを取り入れ、それがGAの参加へとつながり、そしてエンパワーされていた。M6もセッションの中で、他のメンバーと辛さを共有（取り入れ）し、力が与えられたと考えられる。それが後に「欲求のある自分を認める」力となっていた。また、M9の場合はセッションⅡの中では、「病気を認識することや「地獄を見ている」ということを取り入れることができなかった。しかし、家庭で受けた娘からの痛烈な言葉は、「ショックでどうしようもない気持ちになる」ほど辛い言葉の衝撃として、M9の中に取り入れられたのではないか。

言葉はさまざまな意味で力を持っている。同時にその集合体である物語も力を持つ。自分が語る言葉（物語）、また他者が語る言葉（物語）により、力が与えられることも少なくない。とするならば、先述したように、語りを通した自己と他者の相互作用により、それぞれの物語の整理と取り入れの作業の中で、時に力を与えられながら、われわれは自己を構築（再構築）していくと言えるのではないだろうか（図5）。このような作業を通しながら、“認知の再構築”も行われていくものと考えられる。

また、分析結果②の「初期メンバー・長期メンバーの語りの違い」で示したように、初期から長期にかけて、その語りには広がりが見られていた。つまり、グループを通した自己と他者との相互作用による“認知の再構築”を繰り返していく中で、語りのテーマが図6のように、初期から長期へと広がりをもって変容していると考えられる。

初回グループの独自のテーマは、期待と苦痛が伴うほどの変容願望で、これは「初期参加時の心理（期待とあせり）」であろう。そして、初期と長期グループに共通するテーマ群はこれまでの自分

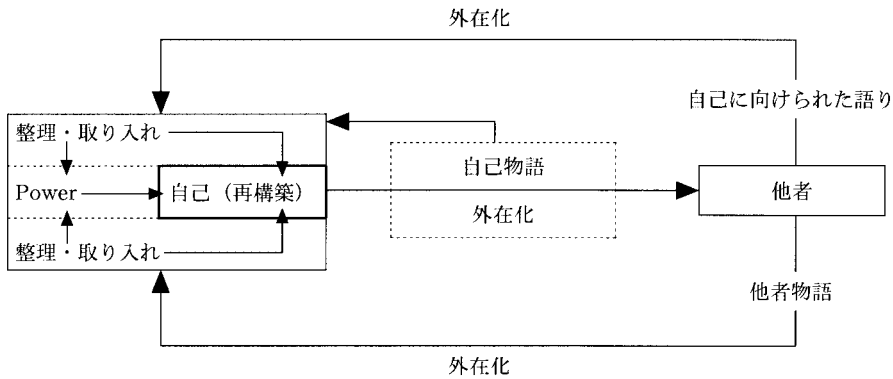


図4 自己と他者の語りによる自己の再構築

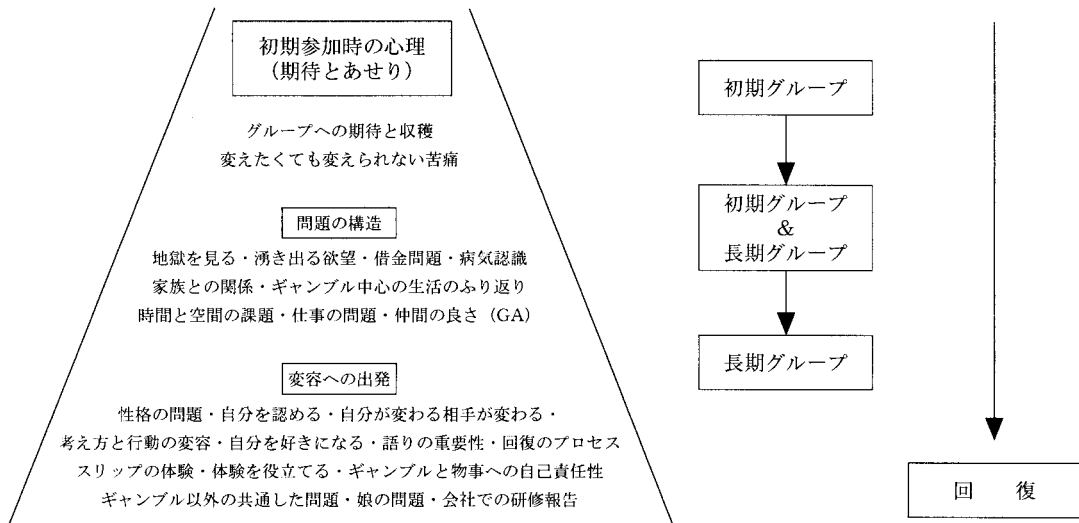


図5 テーマ群の変容—初期から長期への変容—

の生活を振り返っての問題、また現在の課題など、過度に繰り返されてきたギャンブルを巡る「問題の構造」を形作る不変的テーマが中心となっている。そこで長期グループになると、自分を認め、更にポジティブな形で変容させていく“回復”、“自分を役立てる”といった自己変容に関するテーマが増える。更に、ギャンブルのことばかりではなく、日常の何気ない話題提供やその何気ない話題の中に仲間へのメッセージを込めつつ、変容していく自己を語るテーマが多く見られる(「変容への出発」)。

そして、このような語りの広がり、同時に回復へのステップとなっているものと考えられる。

6. おわりに

以上、本稿では、各セッション(グループ)がどのような形で展開されているのか、参加メンバーの生の声を実際に拾いあげること、メンバーの側からの回復の過程を粗描することができたのではないかと考える。

これまで、多くの論者がアルコールや薬物依存

など嗜癖問題の回復に関して、グループによる回復の効果について述べてきている。それは、われわれ専門家はもちろんのこと、一般的にも認識されつつある。しかし、本稿で対象としたギャンブル依存症に関しては、「病気と認めること」自体が一般的にもまだ自明なことではない。更に、当事者にとっては「自分でコントロールできるものである」と信じているであろうし、身体にも症状が現れない状況の中で「病気と認めること」は容易なことではない。本人にとってグループに参加することは、自明ではない世界へ入ることでもある。しかし、グループを媒介としながら「仲間と出会い、自己を語り、自分と同じ体験をしている他者の語りを取り入れながら、自己を語り直し、更にまた他者の語りを取り入れていく過程の中で、自己の構築（再構築）の作業を行っていく。更にグループから離れた日常生活の中でも同様の作業を繰り返しながら、今日一日「ギャンブルを完全にやめていく」ことを繰り返していく中で、ゆっくりと回復の道を歩むのではないかと考える。そして、そのような作業の中でグループも成長していくのではないだろうか。

註:

- 1) 谷岡一朗 (1996) 『ギャンブルフィーヴァー』中公新書, 33-35.
- 2) 田辺 等 (2002) 『精神保健相談のすすめ方Q&A』金剛出版, 135.
- 3) AAはAlcoholics Anonymous の略。1935年に米国(オハイオ州)で誕生したアルコール依存症者の自助グループ。世界規模であり、日本では1975年より始まり、全国各地にグループが存在している。(吉岡 隆(1998) 「物語に添えて」なだいなだ・吉岡 隆・徳永雅子編 『依存症-35人の物語』中央法規出版, 228, 参照。)
- 4) GAはGamblers Anonymousの略。1957年に米国で誕生し、日本では1989年に始まったギャンブル依存症者の自助グループ。GAもAAの方式で行われている。(吉岡 隆(1998) 「物語に添えて」なだいなだ・吉岡 隆・徳永雅子編 『依存症-35人の物語』中央法規出版, 228, 参照。)
- 5) GAMBLERS ANONYMOUS JAPAN (2002) 「全国のミーティング会場」(<http://www4.justnet.ne.jp/~gajapan/gamee.HTM>, 2002.8.20)
- 6) 本論では、話し手の発言(発話)に対して、その数、量やまた方向を示す場合には「発話」という言葉を用いる(例: 発話量・発話数)が、その他本文中で、会話の流れを示す際には「発言」という言葉の方が一般的であるので、後者を使用する。
- 7) スリップとは、依存症の対象を再度使用したり、行ってしまうことで、アルコール依存症の場合は再飲酒、ギャンブルの場合はギャンブルの再開である。しかし、当事者の中には、ギャンブルという行為をしなくても、ギャンブル場に足を踏み入れたこと自体をスリップと捉える者もいる。
- 8) 外林大作・辻 正三・ほか編 (1991) 『誠信 心理学辞典』誠信書房, 205-206.
- 9) 岩間伸之 (2000) 『ソーシャルワークにおける媒介実践論研究』中央法規出版, 68-75.
- 10) Sophia Vinogradov, and Irvin D. Yalom (1989) Concise Guide to Group Psychotherapy (=1991、川室 優訳) 『グループサイコセラピー ヤーロムの集団療法の手引』金剛出版, 23-42.)
- 11) Alfred H. Katz (1993) Self-Help in America (=1997、久保紘章『セルフヘルプ・グループ』岩崎学術出版社, 11-27.)
- 12) 田辺 等・大場千佳 (1996) 「精神保健センターにおける病的賭博の集団療法」『アルコール依存とアディクション』13 (2), 116-122.
- 13) 野口裕二 (2001) 「第1章 集団療法の臨床社会学」野口裕二、大村英昭編『臨床社会学の実践』有斐閣, 14-18.
- 14) ここで述べる外在化の概念は、ナラティブ理論の学問背景にある社会構成主義の理論における外在化・客体化・内在化の概念から、自己を語る言説は会話を通して外在化され、客体化され、内在化されるという考え方に基づいたものである。(野口裕二 (2001) 「社会構成主義という視点-バーガー&ルックマン再考-」小森康永・野口裕二・野村直樹編『ナラティブ・セラピーの世界』日本評論社, 参照。)

この論文は、熊谷治子 (2002) 『ギャンブル依存症の病理構築と回復の過程-語りの分析から-』北星学園大学大学院社会福祉学研究科2001年度修士論文の一部を修正、加筆したものである。